

暴言暴力の根絶に向けて

JBA U12 フェアプレイ促進グループ

豊田 則成
(びわこ成蹊スポーツ大学)

1

暴力暴言の事例 (1/6)

子どもからも保護者からも信望が厚かった。週3回以上の練習に、週末は練習試合に明け暮れた。「熱血指導」が常で、普段の指導場面から大きな声で指導し、行き過ぎた指導を行うことも散見された。指導力には定評があり、全国大会への出場経験もある。チームの統制は高く、チームワーク作りにも余念がない。

A氏：大きな声出すと子どもたちが機敏に動き、気分が高まる。すると子どもたちは指導した通りに取り組む。すると子どもたちは上達し、こちらに一層従うようになる。良い指導をする上で大きな声は不可欠。ただ、行き過ぎると萎縮してしまったり、こちらの目を過剰に意識し過ぎて、楽しめていないことも。

3

個人のプライバシーを保護する主旨から、年齢性別不詳としたい。事実関係に大きな齟齬がない範囲で、事例内容には、若干の加工を施している。しかしながら、結局、事勿れで解決をしてしまったがために、この集団では、数年後、また同じような事案が発生してしまった。暴言暴力は繰り返される。このような行為は、結局、どこかで破綻をきたしてしまう。

2

暴力暴言の事例 (2/6)

罵倒するような暴言は日常茶飯事で、子どもたちは明かにコーチに怒られるのが怖い様子。子どもの集中が途切れると「何をしてるんだ！バカ！」と大声をあげるのは当たり前となっていた。コーチの目を気にしながらプレイすることが集中力欠如の原因にも関わらず、大声を繰り返し、思い通りにコントロールしようとしていた。

A氏：子どもたちのためにと思って厳しく指導してきた。以前は、ミスのペナルティと称して屋外を走らせていたこともある。今は、そこまではないけれど、保護者も厳しい指導を求めている。今まで保護者からのクレームは一切なかった。任せてもらっていた。今となっては、それも思い込みだったのかなと思う。

4

暴力暴言の事例 (3/6)

常に、全国大会を目指して取り組んできた。もちろん、出場経験は大きな達成感となり、本当に嬉しい経験となる。子どもや保護者との一体感もあり、充実していた。その経験をもう一度、皆で味わいたいと公言してきた。勝つことを重んじ、子どもたちにも強く意識させていた。

A氏：勝つことが大事。子どものやる気に繋がるし、保護者も喜ぶ。勝つからこそ、子どもや保護者とも良好な関係を築くことができる。だから、勝つために厳しい指導は仕方がない。最近、やる気があるのかな？と疑いたくなるような子どももいて難しい。でも指導方針を変えようと思ったことは一度もない。

5

暴力暴言の事例 (4/6)

ある日の練習試合。普段の練習の成果がみられず「あんなに教えたのに、何でできないんだ！」と大声をあげた。あまりの不甲斐なさから、ミスをした子どもの胸ぐらを掴んで顔面を平手打ちした。叱咤激励をしたつもりだったが、子どもは却って意気消沈した。他の子どもたちは却って気が入ったのか集中したプレイができた。

A氏：合間に「やり過ぎたかな」と思って叩いた子どもに「悪かったな」と謝った。「でも集中してやらないお前も悪い」と指摘した。その直後、その子が「頭が痛い」と申し出てきた。精神的なダメージもあってのことだろうと察し、「試合が終わるまで、ゆっくりしていなさい」と体育館の隅で休ませることにした。

6

暴力暴言の事例 (5/6)

正直、これまでも、このようなことが何度かあった。以前は、暴言暴力の後、子どもは普段通り練習試合に参加していた。保護者からもクレームは一切なかった。しかし、今回ばかりは様子が異なった。帰宅して様子がいつもと異なることから、母親が病院の救急窓口に連れて行き、診断を受けたら、子どもの左耳鼓膜が破れていた。

A氏：猛抗議が入り急いで家庭を訪問。その場で謝罪した。父親から「これ以上あなたに任せるわけにはいかない」と恫喝された。翌夜に緊急の保護者会が招集され、顛末を報告。多勢の面前で「熱意のあまり行き過ぎた」と謝罪したが、庇ってくれる保護者は一人もない。正直何で自分だけが悪い？と疑問に思った。

7

暴力暴言の事例 (6/6)

日常的に繰り返されてきた暴言暴力の実態が白日の下に晒された。保護者はこれまで大目に見てきたという。それは、我が子を試合に出させたいがために過剰に配慮してのことと吐露した。子どもも保護者も、このやり方で間違はいないと思い込んでいた。「ちょっとやそっと厳し過ぎても当たり前」という雰囲気蔓延していた。

A氏：正直、なんで誰も解ってくれないんだ？あれだけ信頼しておいて何を今更？今までの指導は何だったんだ！と腹が立った。保護者から「これ以上事を荒立てたくない。公にはしないので子どもたちの指導をやめて欲しい」と言われた。都合が良すぎると思う反面、仕方がないなと止む無く承諾することとなった。

8

何故、暴言暴力は繰り返されてきたのか？

1. 事例から読み取ることのできる【悪循環】

- 暴言暴力の**正当化** (暴言暴力を正当化する指導理念)
- 暴言暴力の**常態化** (常に暴言暴力と背中合わせの日常)
- 暴言暴力の**過激化** (平手打ち→ 鼓膜損傷→ 心的外傷)
- 暴言暴力の**隠蔽化** (実態把握→ 改善へ向けての障壁)

2. 事例から推察することのできる【指導観】

- **勝利至上主義** (勝たねばならない唯物的な使命感)
- **直情的な指導** (制圧的で身勝手な指導理念が通底)

9

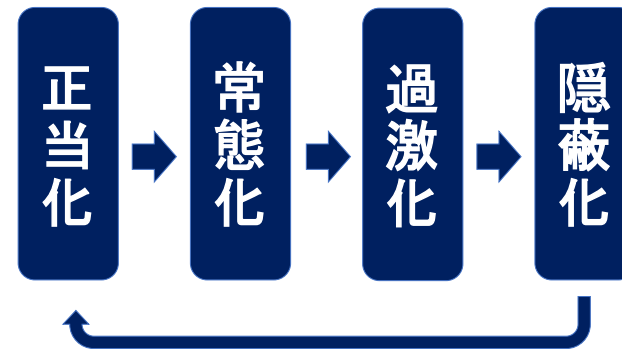


図1 事例から読み取れる暴言暴力の悪循環

10

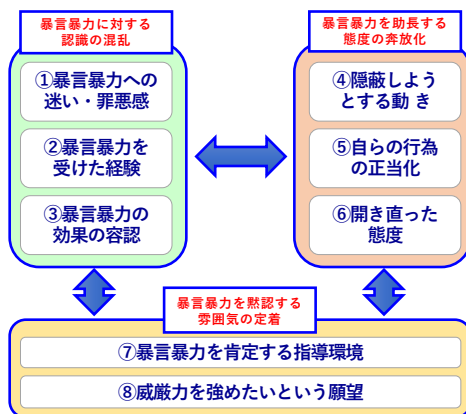


図2 暴言暴力を生み出していくメカニズム

11

12





13

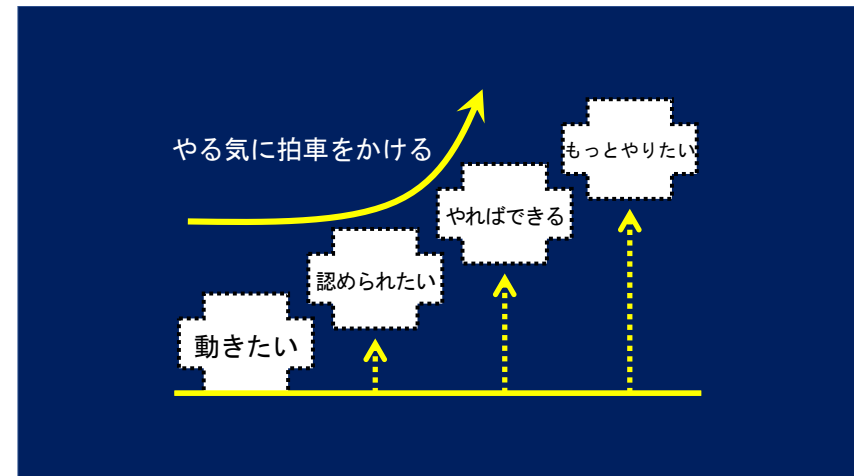
発達段階を解決していく

- ある発達段階での発達課題を解決することは、次の発達段階で直面する課題解決のための**レディネス (準備)**となる。
(次の階へ進むための足場づくり)
- 「**自分らしさ**」を構築していくためには、それ以前の発達課題を解決しておく必要がある。
(課題が解決できない原因のひとつに「下の階の足場」が確立されていない場合がある)

14

「**主体的な取組**」や
自発性
 「**努力を継続すること**」は
勤勉性
 「**自分らしさ**」の礎になる!
アイデンティティ

15



16

我々は、未来に向けた社会的責任を有している

- ❖ 総合的な人間力の向上(人格形成)を目指す
- ❖ 自己実現を支援する
- ❖ 課題や困難に立ち向かう勇気を育てる
- ❖ 結果ではなく達成行動を重視する
- ❖ 自主的であり、主体的であることを重視する

17

自信が「根性」を身につけさせる！

- 自分で考えて、自分できめる
- 努力を惜しまずにやり抜く
- やり抜くことで、自分に自信が芽生える
- 自信が芽生えれば、自ずと根性が身に着く

自分を信じることで自立させていく指導

19



18

「脆弱な」指導観から「骨太」へ

- 「失敗をさせないように」は間違い。
- 失敗から学ぶことの方が遥かに多い。
- 失敗を糧にして、次のステップを教える。
- 一緒に考えながら歩くのが指導者の役目。

スポーツを通じて、努力の大切さや感謝の気持ちを伝えることは、とても大切なこと。

20

「暴言暴力」と「指導」は別もの

- 自分が受けた指導は踏襲しない。
- 更に進化した指導でなければならない。
- 子どもを「支配」することが目的ではない。
- 子どもを「伸ばす」ことが目的である。

自分で考える。他人の眼はごまかせても、自身の目はごまかすことはできない。

21

指導には時間がかかる

- 「悔しい」という気持ちが人を伸ばす
- そもそも人は自分に甘い
- できれば誉めて、できなければ悔しがらせる
- 叩いて悔しがらせるのは、方向の間違い

「暴力」を行使することは「指導の放棄」を意味し、指導者の指導の破綻と敗北を意味している。

23

パフォーマンス向上の背景

- ひとよりも努力した
- ひとよりも熱心に取り組んだ
- あきらめずに食らいついて頑張った
- 叩かれたことが向上の一因であってはダメ…

指導者は、どうやれば子供が熱心に努力するのかを考えることが肝心

22

びわこ成蹊スポーツ大学

豊田 則成

Norishige TOYODA Ph.D

toyoda-n@g.bss.ac.jp

(件名に JBA-U12 と入れてください!)

24